

絵描きたちの登山

小川 稔



「山の日」が制定された2016年の夏。松本市美術館で「遙かなる山」と題した特別展を開催した。明治から昭和まで、新しく発見された風景としての山を描いた洋画、日本画、水彩画、版画を展示した。近代登山発祥の地の美術館にふさわしい展覧会だったかもしれない。

1891年夏、英国人ウォルター・ウェストンが当地で「日本アルプス」を発見したといわれるが飛騨山脈の神々しい姿を先祖たちが知らなかったはずはない。宗教的動機そまびとの山伏らは別として杣人、木地師、猟師に炭焼、ここを日々往来した人々は多かった。

ただ、生活の現場から詩歌や絵画が生まれるためには英国人らがもたらした「風景画」(ランドスケープ)の眼鏡が必要だったということか。

でもそれが明治期に突然起こったともいえない。江戸中期、京都の画家池大雅いけのたいがが友人と立山・白山・富士山に登り三岳道者を名乗ったことが知られているし、江戸後期に出版された谷文晁ぶんちようの『名山図譜』はさらに本格的な全国の山の記録だった。自分の脚と頭と目で山をとらえた彼らの作品から

このころ、わが国の山岳が神仏の支配からようやく脱し始めたことを知ることができる。

南画など、それまでの型どおりの山水画が大きく変化、風景画に生まれ変わるのはいよいよ明治以降のこと。そのきっかけとして信州の若き水彩画家丸山晚霞ばんかと友人吉田博が墨筆を鉛筆に持ち替え、精神修行のように一カ月半をかけ歩いた飛騨スケッチ旅行があったことも忘れられない。

登山は「山の精霊と人間の心魂と融然合一させる境地」と述べたのは西洋ロマン主義の文学、哲学の洗礼を受けた小島烏水うすいだが、心身浄化のため登山し槍ヶ岳を開いた江戸末期の僧、播隆上人ばんりゅうと全く別人種ではなかったように思えてくる。

ところで、わが国最初のアルピニストとして知られる烏水が浮世絵や西洋版画のコレクター、研究者としてもパイオニアであったことはあまり知られていないかもしれない。

山々はそのように、わが国の近代諸芸術の母胎でもあったことを。

(おがわ みのる 松本市美術館館長)